生活仏教の諸相

駒沢大学名誉教授　文学博士　佐々木　宏幹

二〇〇一年三月、アフガニスタンはバーミヤンの世界的に著名な巨大石仏二体が、イスラーム・タリバーンの手により木端微塵に爆砕された。

一体は五五メートル、ほかは三八メートルの仏像は、五世紀頃の作とされている。私はかの仏像は、一九七〇年八月に現地を訪れ、大仏を拝することができたが、すでに顔面は削り取られ、両腕や脚部もかなり破壊されていた。

偶像を認めないイスラームによるものであったことは言うまでもない。

七世紀半ばにかの地を訪れた玄奘三蔵は、大仏は黄金色に輝いていたと記している(『大唐西域記』)。

バーミヤンの大仏が爆砕されたとのニュースは、世界の人びと、とくに仏教徒にとって大きな衝撃であった。心ある人びとは、国際紛争という現実の厳しさを痛感させられた。

時がたち、あのショッキングな事件を冷静に振り返ることができるようになると、人びとは破壊された世界的な文化遺産の今後をめぐり、

声を挙げ始めた。
その声は大別して二つあったように思う。一つは、粉砕された大仏は〝そのままにしておくべきだ〟との声であり、他は仏教文化遺産として〝復元することが望ましい〟との主張である。「現状のままにしておくべきだ」という見解を述べた人のなかに、たしか平山郁夫氏（東京芸大学長）もおられたと思う。
平山氏と同じ見解に立つある識者は、仏陀の教法の特質は〝形あるもの（造られしもの）は必ず滅す〟というところにあるのだから、粉砕された仏像に〝こだわることはない〟と述べていた。
他方、大仏復元を望む人たちは、永いあいだ信仰対象であった大仏が破壊されたままになっていることは仏教者として耐えられないと主張していた。
いま、世界的に有名な大仏が破砕されたことをめぐり、わが国の識者たちの二つの異なる声＝見解・主張を取りあげたが、ここでこれら二つの声のいずれが正しいかを論ずることは、少なくとも〝仏教文化＝生活化された仏教〟という視点からみると、あまり意味がないように思われる。
なぜなら、一つの声は〝諸行無常　是生滅法〟という仏陀の悟りを基盤として挙げられているのに対して、他の声は仏像を衆生救済（済度）の信仰対象として拝みかつ祈る立場から発せられているからである。
ところが仏教を宗教（人びとの苦（悩）の究極的な解決を目指す営み）として捉えようとする限り、これら二つの声は決して別個のものではなく、両者共に必要不可欠の見解・主張であるとしなければなるまいからだ。
前者は〝一切皆空〟を説き、〝おのれこそおのれのよるべ〟の自覚を教える。後者は〝海衆安

穏〟を願い、〝三宝、俯して照鑑を垂れたまえ〟とひたすら念ずる。

かつてバーミヤンの地に巨大な黄金色に輝く仏陀の像をうち仰いだ人びとは、心から生活の無事や旅の平安を祈り、〝力〟をえたにちがいない。いま瓦礫と化した仏像の姿を目にした私たちは、仏陀の説かれた〝空〟の真理をただ厳粛に受けとめるのみである。

今後も人びとは仏像や仏塔を造り続けるであろうが、造られたものは所詮滅しさるはずである。しかし、滅しさることを知りながら、人は仏像を造らないではいられない。色即是空　空即是色の相であるといえようか。

◇　　◇　　◇

世の中は理念や建て前にこだわりすぎてもうまくいかないし、逆に現実や本音にかかずらいすぎても駄目という常識がある。ではどうすればよいか。色即是空　空即是色は根源的な答えであろうが、これを解説しだすと、くどくなる。

そこである仏教関係のシンポジウムのやりとりを事例として、〝理念と現実〟の問題に迫ってみよう。

本年二月に京都で全日本仏教青年会主催により、「〝葬式仏教〟を考える—日本仏教活性化への道」というシンポジウムが開かれ、基調講演の後、四人のパネリストによる討論が行われた。私はこのシンポジウムに出席していなかったが、ノンフィクション作家の井上治代氏が講演と討議内容を概括的に紹介しているので、以下では私が重要と考える部分を引用することとしたい(井上治代「葬式仏教を考える—仏教再生の道を探る—」、『法然』第一二号、浄土宗報恩明照会、二〇〇三)。

基調講演は仏教思想家のひろさちや氏。氏は葬祭の本質に触れ、「怨念を鎮める」とか「たたる霊魂」などを仏教は認めるかと問い、「仏教は

もともと霊魂の存在を認めない。悲しまず死者を忘れろという教えだ」と述べ、僧侶が葬儀を行うことに否定的な意見を語り、仏教者として仏教の原理をきちんと説くことが、仏教を活性化させる道であると強調した。

基調講演を承けてまず井上氏は、現代の家族構造の変化を述べ、「夫婦のみ」と「独居」世帯が全体の半数を占めるのも間近であるとし、「個が尊重される生活が保障されなければならない社会に突入した」と説いた。

そして檀家制度に固執する寺院のあり方に悲観的な見通しを述べ、「檀家制度は保険として残しつつも、並行して個を単位とした活動をすべきだ」と語った。

つぎにフォト・ジャーナリストの藤田庄市氏は、新聞社が一九七八年から毎年行っている国民意識調査をもとに、「宗教は国民の八割から相手にされていない」（朝日新聞、二〇〇三年一月八日）とした上で、しかし「宗教に関心がないという層は、新しい布教の沃野であり、伝統仏教の僧侶が信心決定していることが最重要である」と述べた。

臨済宗・神宮寺住職の高橋卓志氏は七百軒の檀家のほかに「尋常浅間学校」を主宰し、千二百人を超える会員をもつ情報誌『僧伽』を年四回発行。購読料（三千円）が寺のスタッフを雇う財源になっていると述べた。

他に寺院スペースを活用し、「極楽倶楽部」と呼ぶ老人のデイサービスを行い、さらに浅間温泉で高齢者向けのグループホームの運営にも乗りだしており、「お坊さんは、やりようによっては無茶苦茶に面白い職種である」などと説いた。

この高橋氏の話にコメントを求められたひろさちや氏は、「政府の仕事を坊さんがしなければならないと思っているのではないか。坊さんの原点は世間から離れたところにある。坊さんは

寺の庭掃除をしていればよい」と言い、僧侶はどこまでも世間の常識を離れた〝出世間〟を生きるべきだと主張。
翌日には前日のシンポジウムを踏まえ、三つの分科会が開かれ、パネリストと参加者が直接意見を交換し合った。
最後に二日間にわたる研究会を総括したひろ氏は、自分は仏教原理主義者であると立場を明示した上で、原理主義に対立する概念がご都合主義であり、このご都合主義は理想主義と現実主義とに二分されるとした。
そして、藤田氏は原理主義的、高橋氏は理想主義的、井上氏は現実主義的と位置づけたのち、「仏教は釈尊の教えであり、仏教者は原理に立ち帰るべきで、社会の事象に関わるのは、僧侶の仕事ではない」と結論づけた。

◇　　◇　　◇

全日本仏教青年会が主催したシンポジウムの議論は大要以上のとおりだが、これを現代仏教論として私なりに捉えなおすと、つぎのようになろう。
(1)僧侶は社会活動や葬祭などに関わるべきではなく、釈尊の教えに帰り世間から離れて生きるべきだと説いたひろ氏の立場は、〝原理主義的仏教論〟であることは明らかだろう。(2)僧侶に必要不可欠なのはみずからの信心決定であり、決定心があれば、無宗教的に見える現代社会は、実は「布教の沃野」であると述べた藤田氏の論は、〝信仰中心的仏教論〟である。(3)現代の社会構造の急激な変化を見据えた上で、伝統的な檀家制度は残しつつも、これと並行して個人の信仰開発に努めるのがこれからの寺院・僧侶のあり方だと語った井上氏は〝社会・民俗的仏教論〟的な立場を踏まえているように思う。これに対して、(4)寺院住職として在来の寺檀関係的な活動のほかに、会員制の仏教学校や老人向けのク

ラブやグループなどの運営を積極的に進める高橋氏の主張は、〃社会活動的仏教論〃とでも言うべき性格をもつ。

仮に以上のような仏教論の分類が可能であるとして、これら四つの仏教論を前にして、〃仏教活性化〃のためにわれわれはどう考えたらよいのであろうか。

私が本稿のタイトルとして掲げた〃生活仏教〃、つまり「人びとの生活のなかに生きる仏教」という視点に立てば、これら四つの仏教論のいずれもが意味をもっているということになる。生活のなかの仏教は、教義（宗旨）だけで成り立っているのではないし、社会活動重視に傾くだけでも不十分であろう。

生活仏教の現実の相（すがた）は多様な局面・要素から成っているからである。それはまさに〃諸相〃と捉えるのが妥当であるような状況にある。

〃釈尊に還れ、祖師に帰れ〃という立場（(1)）はきわめて重要であるし、そのためにはみずからの信仰や帰依の心が堅固であるべきこと（(2)）も言うまでもあるまい。しかしそうであるからと言って(3)や(4)の立場や論を無視せよということにはならないのではないか。

生活仏教の〃現場〃にあっては、過度の単純化は不毛かつ無意味であるとさえ言えようからだ。

長い間仏教論は建て前を強調する教理仏教論と、民衆の宗教生活に根強く存在する仏教民俗を重視する仏教民俗（又は民俗仏教）論とが、交錯すること少なく展開されてきた。教理仏教論は仏典・祖録を根拠に理念と原則を説き、これに対して民俗仏教論は地域社会の宗教習俗や慣行と仏教の理念とが習合した形で成立している葬祭や祈祷儀礼にこだわった。

前者は無常・無我や縁起の思想なくして仏教と言えるかと主張し、後者は文化の地域性や民俗性に基づく霊や力に関わらずして人びとを惹

きつけうるかと反論してきた観がある。

さきのシンポジウムでも「仏教はもともと霊魂の存在を認めない。悲しまず死者を忘れろという教えだ」（(1)）は前者を代表しており、対して「日本仏教には特有の歴史がある。社会の現象に目を向けない僧侶のあり方は、寺院の将来を危うくする」（(3)）は後者を代弁していると言えよう。

宗教（仏教）文化の研究者たちは、こうした対立を〝テクスト〟（教義・理念）と〝コンテクスト〟（社会・現実）間の深刻な問題と捉えた。そして大事なのは理念か現実かといった二者択一的論議ではなく、理念と現実、教義と民俗とが重なり合い、反発し合い、混じり合う〝ダイナミックな場〟であるとした（たとえばM・M・エームズ「仏陀と踊る霊鬼」、『アメリカン・アンスロポロジスト』六六、一、一九六四）。

この宗教（仏教）における〝ダイナミックな場〟の研究は、実はまだそう深められていない、新領野であると私は、考えている。

この領野が深まれば、さきに引用した事例の(1)、(2)、(3)、(4)のどれが正しいかではなくて、寺院の〝生活仏教〟にあっては四つのそれぞれが複雑に絡み合いながらダイナミックな〝場〟を作りだしていることが明らかになるに違いない。

誤解されるといけないので一言付け加えておこう。仏教が仏教である限り、(1)の立場は不可欠であり、仏教者の目標である。問題は(2)、(3)や(4)の位置づけにある。現実には(2)、(3)、(4)が(1)を支えているという局面を見落としてはなるまい。

もう一度最初に戻ろう。バーミヤンの大仏は破壊された。それは生滅の法の真理性をわれわれに如実に見せてくれた。しかし、その真理性を十分承知しながらも、人びとは大仏再建を企図せずにはいられないのだ。〝生活仏教〟とはそういうものであろう。